定光寺本堂

見てみよう、訪ねてみよう、せとの歴史と文化財

せと歴（れき）!

源敬公（徳川義直）廟

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見　せと　歴史と文化財を知る見学会

「定光寺本堂　こけら葺葺き替え工事見学会」

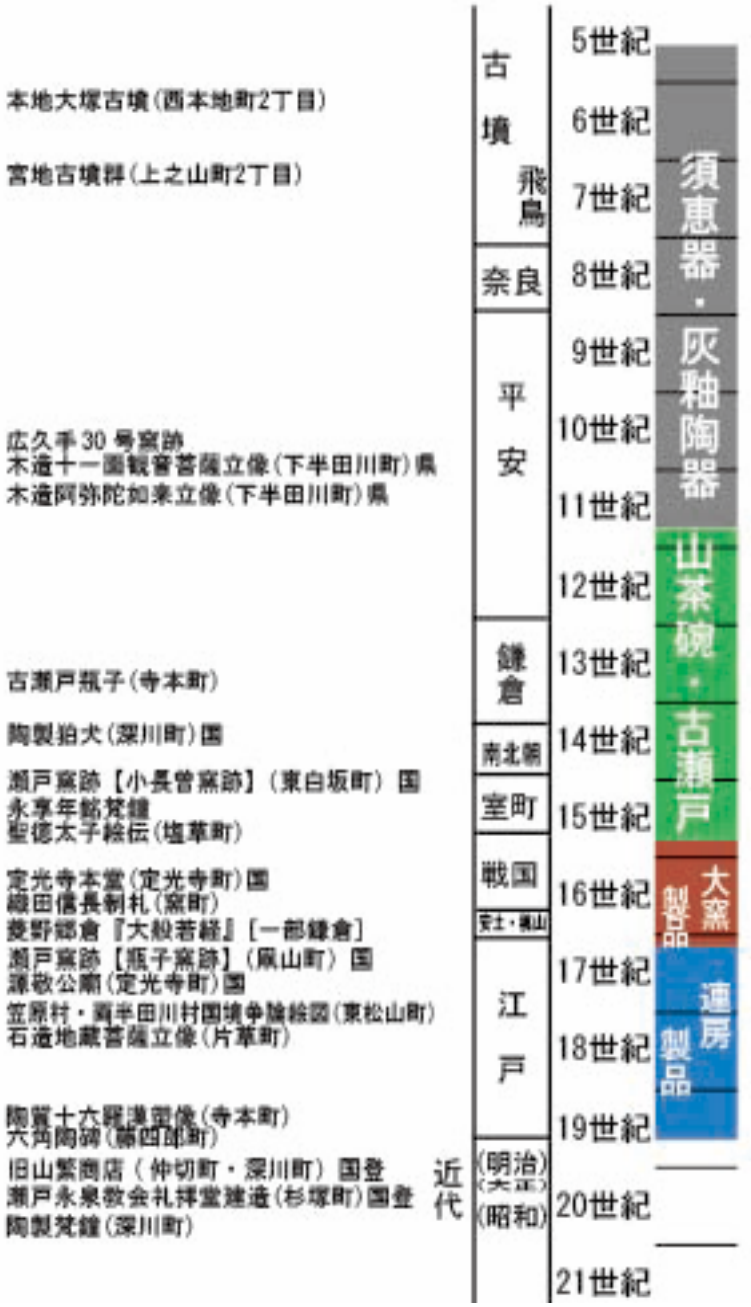
主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団
協力：定光寺・（一財）建築研究協会・田中社寺（株）

日時：平成２９年６月２４日（土）

見学コース：①午前10時00分　②午後1時00分　③午後2時30分　定光寺駐車場→本堂前集合　あいさつ
（予定時間）　A：定光寺本堂こけら葺屋根葺き替え工事
解説：（一財）建築研究協会 古荘貴也・田中社寺（株）
B：定光寺および本堂について　解説：瀬戸市職員

午前11時00分　午後2時00分　午後3時30分　定光寺本堂説明終了　（源敬公廟見学・説明開始）
午前11時30分　午後2時30分　午後4時00分　（源敬公廟説明終了）

瀬戸市域の主な指定・登録文化財　　やきもの生産の変遷　　今回見学する文化財とその関連年表



【①定光寺】

1336 開山
1341「七堂成就」1348 仏殿（本堂建立）
1435 本堂焼失
1477 七堂炎上
1493 本堂再建
1500 本堂建立（宮殿壁板墨書）
1510 地震で本堂破損
1532 本堂炎上　1534 本堂再建

【②源敬公廟】

1650 徳川義直逝去
1652 源敬公廟完成
1699 獅子の門完成

1939 本堂解体修理（大屋根の復元）
1959 伊勢湾台風で被害
1961・1993 屋根葺替工事
2017 屋根葺替工事

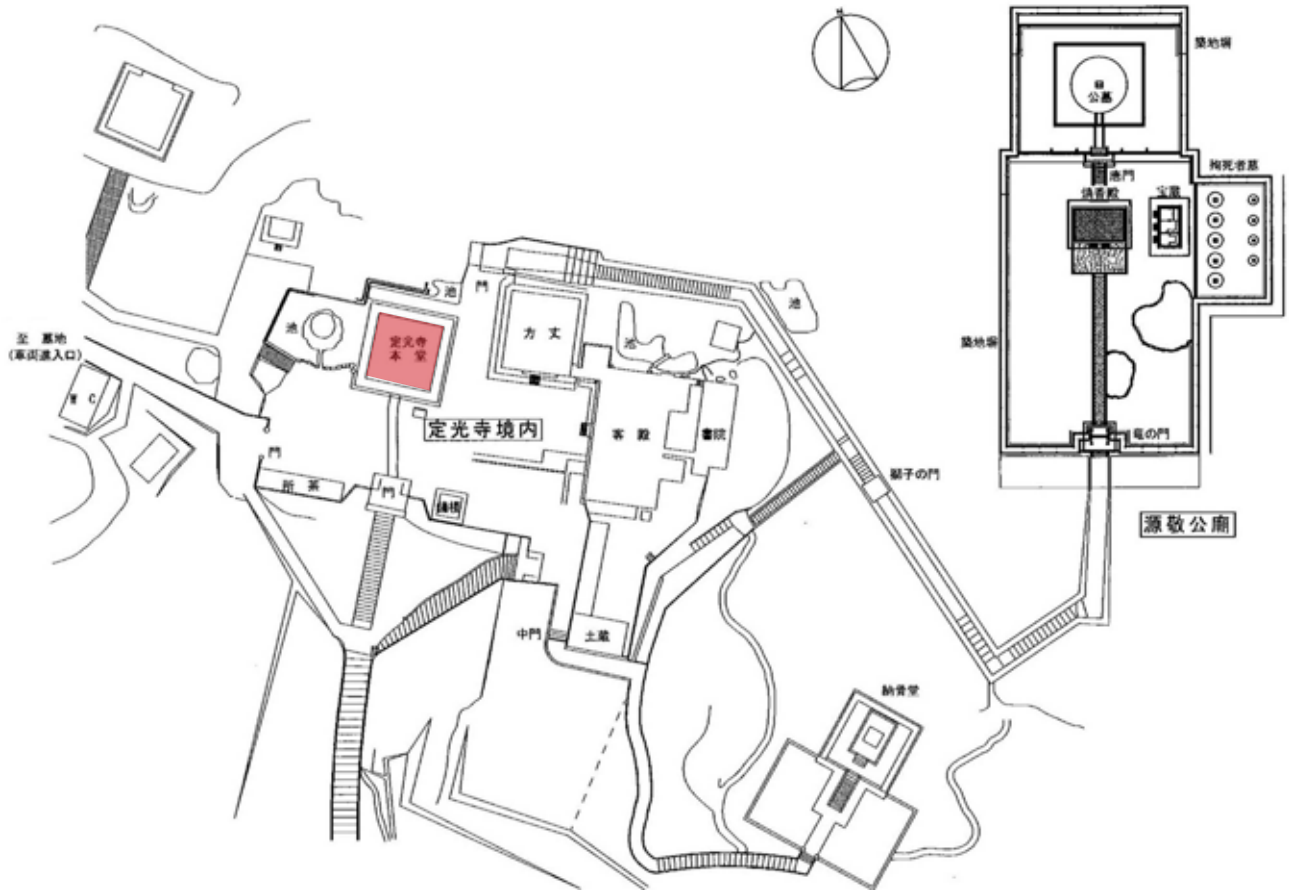
1 定光寺本堂

①定光寺の沿革

応夢山定光寺は、建武３年 (1336) に覚源禅師（平心書斎）によって開かれました。禅師が全国を行脚する中で尾張国水野に至り、炭焼窯跡に庵を結び、後の暦応元年 (1338) に「無為」と名付けた建物を造営、地方領主の水野致國 (中郷殿) などの援助を受けながら同４年 (1341) に庫裏、方丈が建てられ七堂の地が定まりました。この頃、仏殿を建設する地から「定光古仏」と称される仏像を一体掘り出す夢を３人の僧が同時に見たことから、禅師は山号を「応夢山」、寺号を「定光寺」としました。貞和４年 (1348) には仏殿が建立され、禅師の出生時に母の霊夢に地蔵菩薩が現れた故事にちなみ、地蔵菩薩と本尊として安置しています。このため、今日まで子授けの地蔵尊として地方の人々の信仰を集めています。

開山当初は、臨済宗建長寺派でありましたが、慶安３年 (1650) に初代尾張藩主徳川義直 (諡は源敬) が没してその廟を境内に築くにあたり、妙心寺派の智光禅師 (喝堂全用) が本寺の住職として任ぜられ、以降歴代住職はその法脈を継いでいます。

『尾張名所図会』に描かれた定光寺境内（一部）



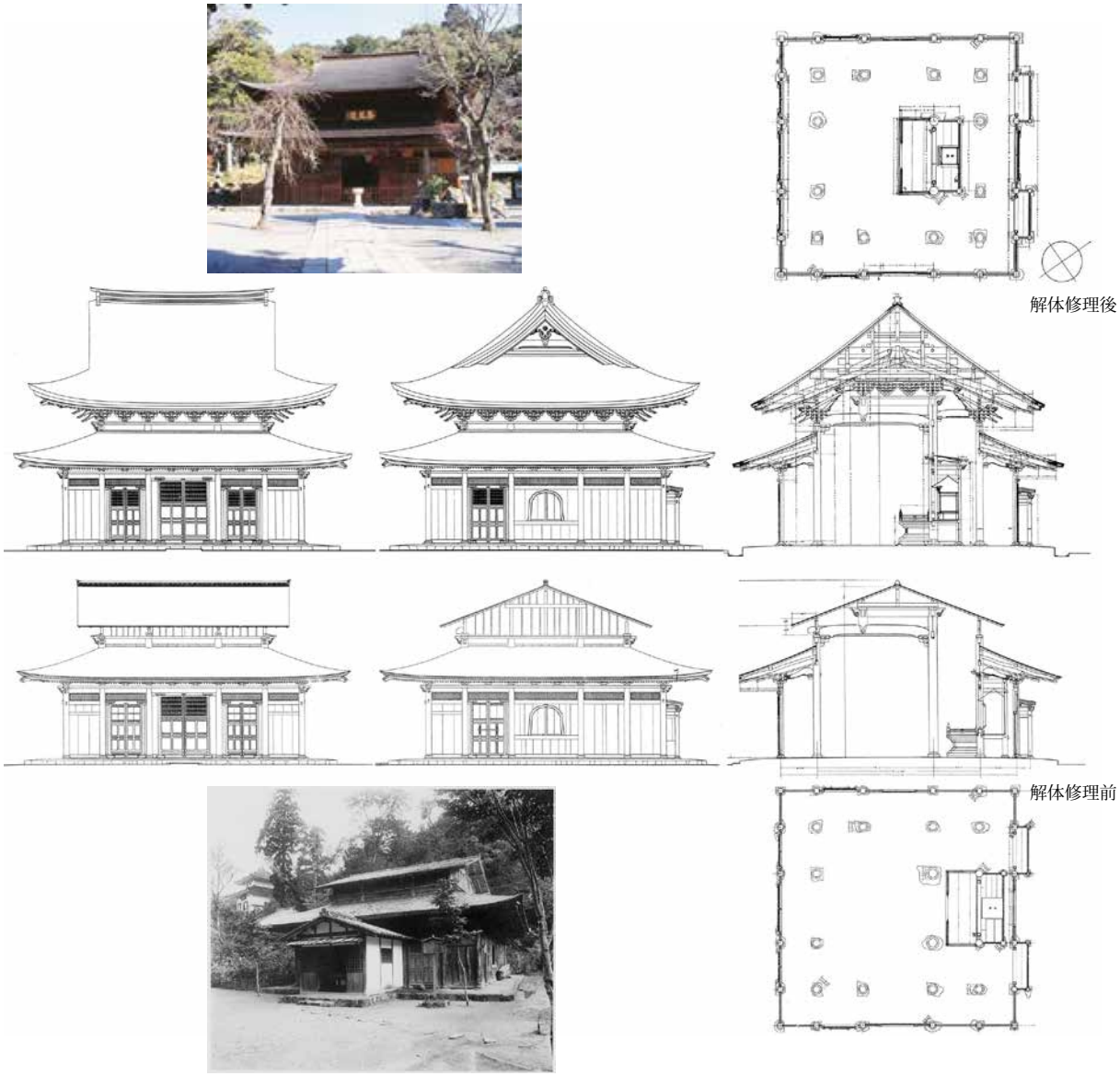
定光寺境内主要部　建造物等配置図 (1：1,200)

②本堂（仏殿・無為殿）について

「本堂は、方三間・入母屋造・こけら葺の主屋の周囲に裳階をとりつけた一重裳階付の禅宗仏殿の形式である。主柱は総丸柱で、組物は禅宗様の三手先詰組を用いる。裳階には三斗組、双折桟唐戸、花頭窓、弓連子をいれる。内部は一つの空間で、土間の後方に来迎柱をたて、前に禅宗様須弥檀をおく。来迎柱から前方の主柱にかけて大虹梁をかけ、前より1間入ったところに大瓶束をたて、頭貫をいれて二手先詰組をおく。須弥壇上の1間四方には鏡天井を張るが、その外1間通りは放射状の扇垂木をみせ、主柱と裳階柱の間は海老虹梁でつないでいる。禅宗仏殿特有の上昇感の強い空間構成になっている。」(沢田多喜二『文化財ナビ愛知』HPより)

建造年代については、暦応4年(1341)から寺の堂宇建立が本格化するなかで、貞和4年(1348)に仏殿が建立されたと『覚源禅師年略譜』に記されています。以降、永享7年(1435)、文明9年(1477)に焼失、明応2年(1493)に再建され、本堂の内部中央に安置され今日に至る宮殿の壁板墨書から明応9年（1500）に竣工したことがわかります。永正7年(1510)に大地震で倒壊、その後再建されるも天文元年(1532)に炎上し、天文3年(1534)に再建工事がなされ、その後も江戸期等に修復が加えられました。

このため、南北朝、室町中期・後期、江戸期の建築様式が混入しています。昭和14年（1939）の解体修理では、破損が進んで大屋根部分が失われていたものを、鎌倉の円覚寺舎利殿など同形式の仏殿に倣って復元されました。



定光寺本堂　昭和14年解体修理前後の状況(1：300)（上：解体修理後　下：解体修理前）

③今回の保存修理事業

（1）これまでの経緯

定光寺本堂は大正 15 年 (1926) に文化財に指定されました。昭和 14 年 (1939) には解体修理が実施され、その後昭和 34 年 (1961) の伊勢湾台風で倒木等により被害を受け、昭和 36 年（1961）に屋根葺き替え修理を行いました。平成 5 年 (1993) にも屋根の経年劣化のため屋根葺き替え修理を行っています。

しかし、屋根柿葺（こけらぶき）は平成 5 年（1993）の葺き替え修理後、今日まで 23 年を経過して、平成 25 年（2013）に部分葺き替え修理が行われましたが、屋根全体にわたって葺板（ふきいた）の劣化・摩耗が進み、葺き替えの時期に達しています。

（2）修理前の状況

大屋根の軒付（のきつけ）は二重軒付ですが、腐朽はみられませんでした。裳階（もこし）の軒付は、一部に腐朽がみられました。

平葺（ひらぶき）は、大屋根・裳階とも葺板の摩耗が著しく、背面（はいめん）部は黒変し、青カビが発生していました。

なお、裳階上層の雨落位置より上方の平葺は、腐朽破損はあまり生じていませんでした。この部分は昭和 36 年、平成 5 年の葺き替え工事の際も葺き替えておらず、昭和 36 年の解体修理時の平葺が残存しています。

箱棟（はこむね）は、巾木（はばぎ）（幅木）のめくれがみられました。

その他、木部では本堂背面の円柱の礎盤（そばん）や地面に接する横木である地覆（じふく）に蟻害（ぎがい）がみられ、須弥壇（しゅみだん）の丸瓦型棒木（ぼうぎ）については止釘（とめくぎ）が外れ乱れていました。

修理前 柿葺の劣化状況

修理前 雨染みによる軒付劣化状況

修理前 礎盤（そばん）の劣化状況

修理前 宮殿の丸瓦型棒木の状況

※ P4・5 の画像は、(一財) 建築研究協会・田中社寺㈱より提供を受けました。

（3）今回の保存修理事業

（屋根葺き替え工事の概要）

柿葺の軒付は身舎（もや）の東面、南面の一部を積み直します。平葺は裳階上層の雨落位置より上部を再用しますが、それ以外は葺き直します。定光寺本堂の柿葺板材は長さ１尺５寸（約45cm）と通常の事例よりも長いのが特徴で、柿材を拵（こしら）えるところから計画的に準備を行いました。

品軒付（しなのきづけ）（妻部分とも）を積み直します。箱棟、鬼板は一部補修します（下の正面図を参照してください）。

その他、礎盤などを矧木（はぎき）（傷んだ部分を補修）し、須弥壇の宮殿（くうでん）丸瓦型棒木を一部葺き直し、大屋根の避雷針の取り替えを行います。

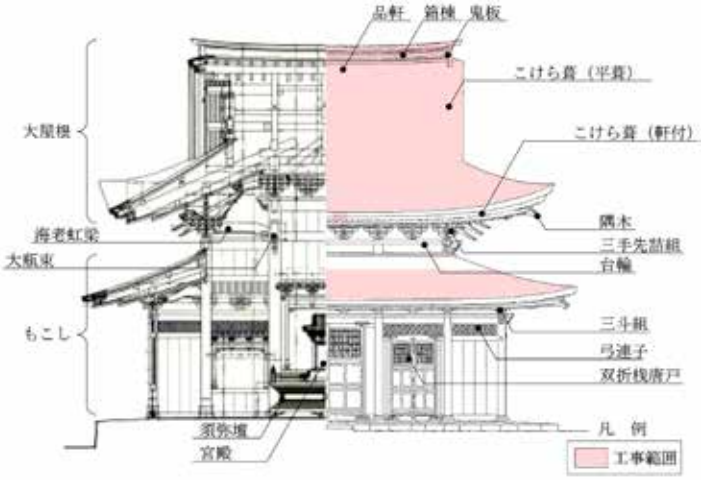
平成 28 年 12 月　柿板拵え（玉切り）

平成 28 年 12 月　柿板拵え（板へぎ）

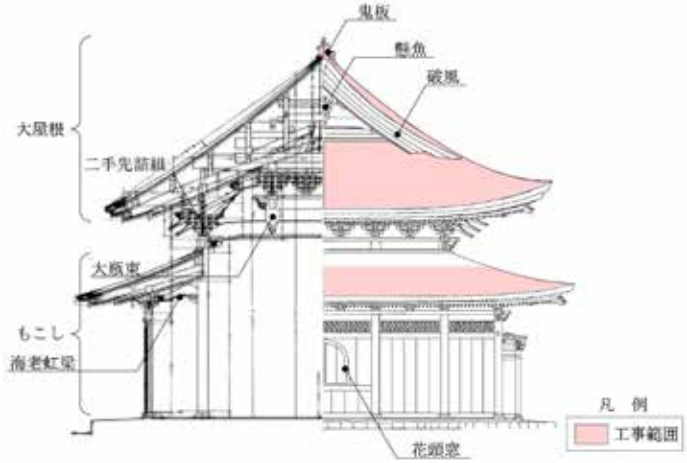
平成 29 年 3 月　素屋根設置状況

平成 29 年 4 月　柿葺き材撤去状況

平成 29 年 6 月　柿葺き施工状況（隅葺）



左：桁行断面図　右：正面図（南立面図）



左：梁間断面図　右：側面図（東立面図）

④こけら葺きの技術

（１）柿葺（こけらぶき）

【素材】

①柿板整形

柿葺に使用する柿板は、油分や粘着力があり、木目の通った耐水性のある椹（さわら）・杉・栗などの大径木を輪切りにした赤身材から、柾目（まさめ）の薄板を小割にしたものです。

直径 60㎝内外で、樹齢 120 年から 200 年生のものが良いとされています。最も一般的な工法は、岐阜・木曽の中部地域を中心に京阪神、九州に及ぶ「三州流」と呼ばれるものです。

原木を材寸法に合わせて玉切り（輪切り）し、みかん割り（6 等分から 8 等分）にします。

次に、寸法定規を用いて主に厚みを 1 寸 6 分（約 5㎝）に小割（こわり）し、そば取り、木口（こぐち）削りを行った後、8 分・4 分・2 分・1 分と順次、2 分割を繰り返し、板をへいでいきます。

※木曽地方では板を「割る」ではなく、「へぐ」と呼んでいます。

①原木

②玉切り

③みかん割り分割
（大割包丁、木づち使用）

④木取り

⑤そば取り

⑥木口削り

⑦板へぎ（順次２分割）

⑧板へぎ（厚み１分）

【2】技術・工法

木材を直接用いた板葺は世界各地で見られますが、その多くは厚板を並べ、石を置くなどの無骨な形態のもので、日本の柿葺のように、華麗なまでに発達した地域は他では見られません。

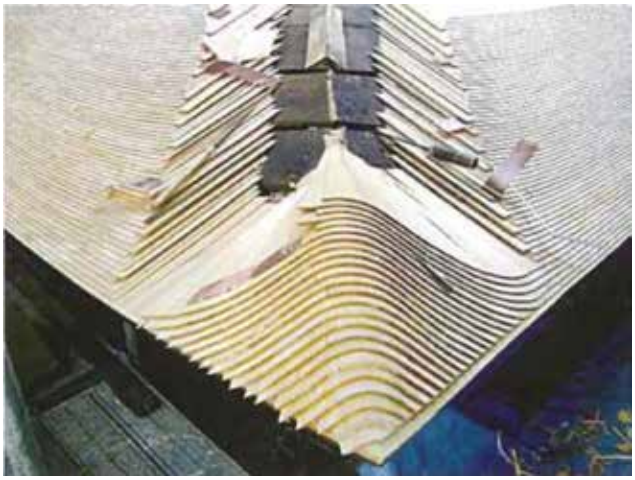
柿葺は、板葺の一種です。柿が、「木片」を意味するように、椹などの薄い手割りの板を野地板（のじいた）の上に、１寸（約３㎝）ほどの間隔で葺き重ね、竹釘で留めて順次、上の方向に葺き上げていきます。柾目（まさめ）に沿って割られた柿板で屋根を葺くと、板が重なり、その目と目の隙間が屋根裏の通気を促して、木材の耐久性を高めます。

檜皮（ひわだ）葺と同じく入念に施工された仕上がりは優雅で、繊細な上品さが漂います。厚みにより、栩（とち）葺（9㎜以上）、木賊（とくさ）葺（9～3㎜）、柿葺（3㎜前後）と呼び分けています。

軒付（のきづけ）

平葺

平葺（葺込銅板入）銅板（屋根の腐朽防止）



隅葺

駒額（こまびたい）

品軒付（しなのきづけ）

（2）竹釘

檜皮葺や柿葺に使われる竹釘は、葺師（ふきし）自作のものが使われていました。いまでは専門職人である「竹釘師」によって製造され、素材も真竹（まだけ）が多用されるようになりました。

通常、竹を長さ３．６㎝、径3㎜程度に裁断した後、天日乾燥させて焙煎します。檜皮葺に使用される竹釘は、一坪（3.3㎡）当たり、平葺箇所で2,400～3,000本という膨大な量が必要とされています。

「葺師」は竹釘を20～30本ほど口の中に含み、舌先で１本ずつ、向きを揃えて選り出しては「屋根かな」（金槌）のふせ金部分にあてがい、葺材に打ち込み、つち頭で数回たたき留めていきます。

片手は葺材を押さえたまま、もう片方の手だけで竹釘を打つ技術です。檜皮葺などは30～40年で吹き替える必要がありますが、竹釘は葺き替え時期がきても、傷みがありません。

①真竹

②荒取り

③節の鉋削り

④中割り

⑤小割り

⑥面取り竹

⑦裁断

⑧天日乾燥

⑨焙煎

（3）道具

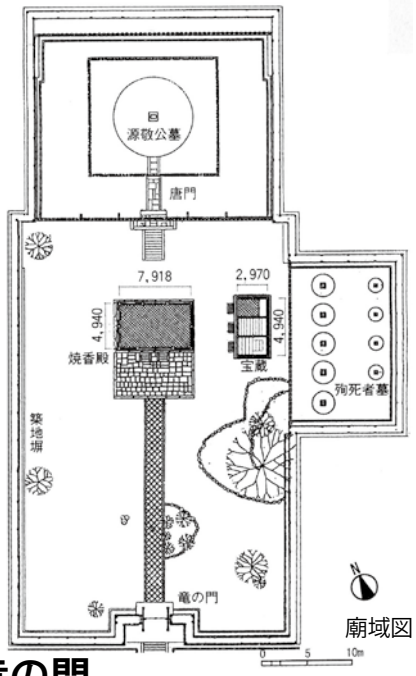
〈採取・檜皮葺・柿葺〉
屋根金槌、檜皮包丁、腰ナタ、大切包丁、銑（せん）包丁、
チョンナ、わく、大割包丁、へぎ（へぎ包丁）、
へら、シャク、コロ、ぶり縄、木づち

※「④こけら葺きの技術」は、文化財修理技術保存連盟 2015『平成 28 年版　文化財建造物保存技術資料集』に一部加筆して掲載。

2 源敬公（徳川義直）廟

源敬公廟は、慶安3(1650)年に没した尾張徳川家初代藩主の徳川義直の墓所です。慶安4(1651)年に墳墓・石標、承応元(1652)年に竜の門以奥の門(唐門)・殿舎(焼香殿・宝蔵)・築地塀が完成し、元禄12(1699)年に獅子の門が建てられました。

徳川義直は儒教の影響を強く受け、死に際しても他のほとんどの諸大名が仏式の墓を築く中、仏式の法名を受けることを拒んだため、霊廟は儒教式の建築となりました。設計は、明から帰化した陳元贇によるものと伝えられ、儒教の礼制に基づく建物配置をとり、殿舎の銅葺瓦に魚形の正吻や蕨手を乗せるなど中国風の意匠が一部にみられる点は他に例を見ませんが、禅宗様を基調として彩色や彫刻は限定的です。江戸時代前期における中国建築の理解の実態を示す事例として興味深い建造物です。



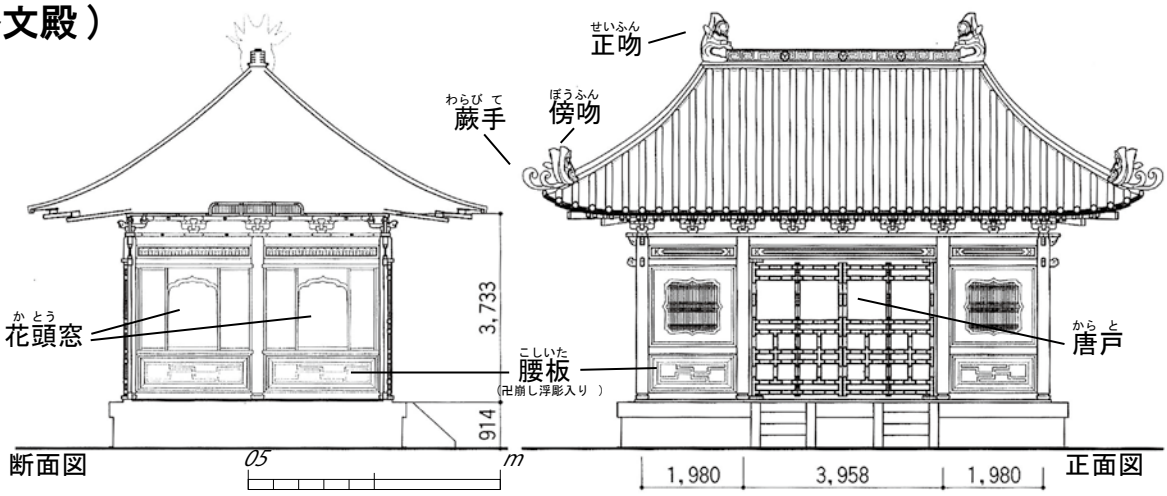
廟域図

◎竜の門

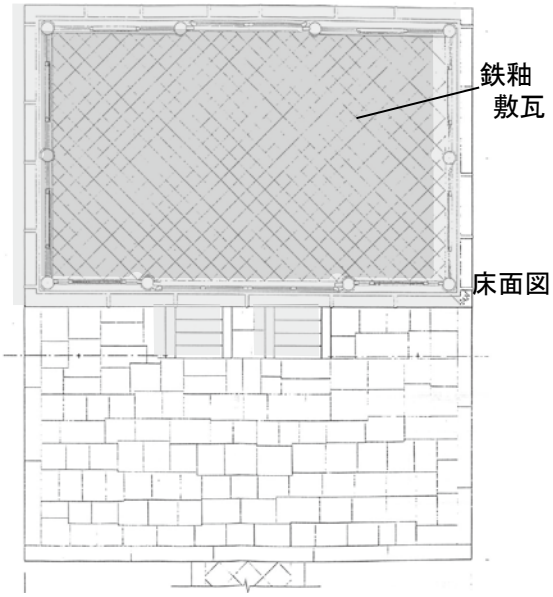
鞘設置前の竜の門(太田正弘編1984『定光寺誌』より)

◎焼香殿（祭文殿）

正面は中央間が二つ折れの桟唐戸をなし、唐戸に嵌め込まれた綿板の外面には、精緻な雲竜の透かし彫り欄間彫刻がみられます。



鞘設置前の焼香殿



焼香殿床面の鉄釉敷瓦

宝蔵床面の志野釉敷瓦（裏面の墨書）
左：「ちノ一」「赤津」「又左ェ門」「北ノ方」
右：「わノ一」「品野」「忠左ェ門」「北東方」

焼香殿敷瓦の裏に記載された窯・人名一覧

窯	枚数	人名（瓦の枚数）	%
瀬戸	三四〇	いの助 25	五四
	□三〇五	善太郎※ 10	
	⊿三五	長太夫 27	
		伝吉 9	
		権三郎※ 22	
		作蔵 8	
		久次郎 16	
		金左 2	
		市助 8	
		清九郎※ 17	
		勝助 1	
		作右衛門 8	
		左平次 14	
		金三郎※ 3	
		徳右衛門※ 11	
		金左衛門 1	
		角三 1	
		作兵へ 15	
		角蔵 1	
		七郎作蔵 11	
		七郎右 5	
		清四郎 2	
		勝四郎 3	
		角左 5	
		作左衛門 1	
		伝兵へ 2	
		角左衛門 2	
		久八郎※ 2	
		久左 1	
		文字不明 64	
		善三郎 2	
		長兵へ※ 1	
		長三郎 1	
		万 15	
		善四郎※ 14	
		文字なし 20	
品野	一三八	□一二三 ⊿一五	二二
		文字なし一三七	
		善九郎カ 1	
あかつ	七五	□六五・⊿九・△一	一二
		善左衛門※ 1	
		忠右衛門（左）※ 1	
		又左衛門 2	
		小兵へ 24	
		○（判） 1	
		一 7	
		○ 15	
		文字不明 4	
		文字なし 20	
水野	四三	□四二・⊿一	七
		善九郎※ 1	
		文字なし 42	
その他	一三	□一三	二
		長太夫 1	
		加藤市左衛門 11	
		春 二 1	
不明	二一	□一六・⊿四・△一	三
		文字なし 14	
		文字不明 7	
総計	六三〇	□五六二・⊿六四・△二	一〇〇

（昭和六一年七月　瀬戸市史編纂委員会調査）

※印『優兵衛家文書』「拾四人御用相勤申候者」にある人名

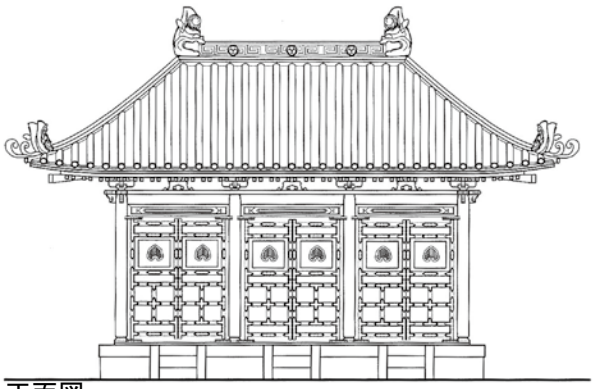
（山川一年ほか 1998『瀬戸市史 陶磁史編 5』P142 より）

宝蔵敷瓦の裏に記載された窯・人名一覧

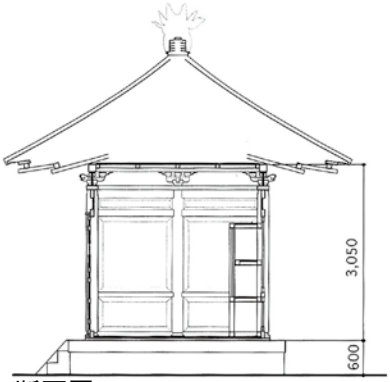
窯	枚数	人名（瓦の枚数）	%
せと	五三	□四一・⊿二二	五九
		善太 5	
		左平次 2	
		善左 1	
		文字なし 45	
品野	一五	□九・⊿六	一七
		忠左衛門 5	
		彦九郎 1	
		角左衛門 5	
		文字不明 1	
		市左衛門 2	
		一六左衛門 1	
赤津	一三	□九・⊿二・△二	一四
		小兵衛 4	
		善左衛門 1	
		多兵衛 3	
		一仁兵衛 3	
		又左衛門 2	
不明	九	□六・⊿三	一〇
		文字不明 5	
		文字なし 4	
総計	九〇	□六五・⊿二三・△二	一〇〇

（昭和六一年七月　瀬戸市史編纂委員会調査）

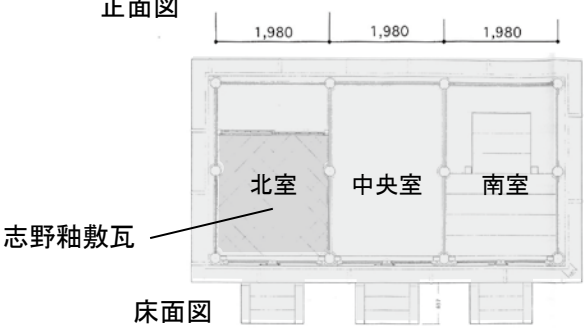
◎宝蔵（祭器庫）



正面図



断面図



床面図

鞘設置前の宝蔵

焼香殿・宝蔵の正面図・断面図および廟域図は、溝口正人 2006「源敬公（徳川義直）廟」『愛知県史 別編 建造物史跡』より

今後のスケジュール

＜７月＞

せと歴！　まちめぐり　下品野地区

日時：７月８日（土）　午前の部：午前１０時～正午

午後の部：午後１時３０分～３時３０分

集合・解散場所：下品野公民館駐車場

内容：全宝寺、津島社、五丁目観音堂などをめぐります。

参加費：無料　　定員：各部３０人

※申し込み方法等、詳しくは広報せと６月１５日号に掲載しています。

せと歴！　定光寺こけら葺替え工事現地見学会Ⅱ

日時：７月２９日（土）　午前１０時～午後３時

内容：新しく葺替えられたこけら屋根を工事用足場から見学できます。

参加費：無料

※申し込みは不要です。直接現地へおいでください。見学者多数の場合はお待ちいただく場合もあります。

瀬戸市歴史文化基本構想ホームページ

昨年度、策定した瀬戸市歴史文化基本構想や基本構想に関連した取り組みをホームページにて掲載しています。

これまでに開催した「まちめぐり」や「学び塾」の様子を紹介するとともに、「まちめぐり」の資料をダウンロードすることができます。

アドレス：http://seto-cul.jp/rekibun/

ぜひ、ご覧ください。